令和４年 11 月３日

2022 年度 ときわ会　教育研究発表会
英語科

五泉市立村松桜中学校
井上　定浩(H17 年度)

「評価することを指導する」授業を目指して

主張

昨年度から中学校学習指導要領（英語）が改定された。改定の主なポイントは以下の通りである。

① 使用語彙数が前学習指導要領の 1200 語から、小学校で学習した語彙に 1600～1800 語程度の新語を加えた語彙数へ大幅に増加した。
② 言語材料（文法）については、「現在完了進行形」「仮定法」「主語＋動詞＋目的語＋原形不定詞」など、前学習指導要領では高等学校で扱っていた内容が追加された。
③ 互いの考えや気持ちを伝え合う対話的な言語活動を重視する。
④ 具体的な課題を設定するなどして、学習した語彙、表現などを実際に使用する言語活動の繰り返しを通して、資質・能力を育成する。

これまでの自身の授業を振り返ってみると、「単元配列通りに教科書を進めていく授業」「言語材料（文法）の解説とその練習に大半の時間を費やす授業」が多数存在しており、上記学習指導要領改訂のポイントに対応できていないという課題が明らかになった。本実践は、その課題克服を目指して、試行錯誤しながら自身の授業改革に取り組んだ。

1　主題設定の理由

これまでの私の授業は「積み木型授業」が多く存在していた。私が考える「積み木型授業（以下「積み木型」)」とは,「単元配列通りに教科書を使って授業を進め、各単元における言語材料（文法）の解説と練習によって構成した授業」である。「積み木型」では、見通しがなく、教科書に書かれている内容の教え込みが中心となってしまい、最終的にどのような力をつけたいのか明確になっていないことがあった。

バックワードデザイン（逆向き設計）への授業転換が叫ばれる中、「積み木型」でも単元配列通りに教科書を使って授業を進めれば、言語材料（文法）と４技能（聞く・読む・話す・書く）を総合的に指導することは可能であり、むしろ毎時間生徒のことをしっかりと考えて丁寧に指導することができていると考えていた。

しかし，以下のような課題もあった。例えば生徒に英語で発表させる単元においては、短期集中的に授業をすることになる。そのため、単元導入から課題発表までの授業時間が数時間しか確保することができず、結局生徒の準備時間が足りなくなり、パフォーマンス発表場面で期待した成果が得られなかった。また、言語材料（文法）の指導については、並べ替え問題や適語記入問題などの「いわゆる文法問題」を解答する力をつけることはできた。一方で、目的や場面、状況を設定した中で、既習言語材料（文法）を活用してコミュニケーションを継続する力をつけることは難しかった。さらに、教科書本文の取り扱いでは、新出語彙の意味確認や発声練習、本文の聞き取り（読み取り)、本文内容のＱＡ解答、重要表現の解説、本文の音読（暗唱）という流れの指導の

中で、４技能の指導を形式上行うことはできていた。しかし、当該単元終末時に評価する技能を明確に意識していなかったことで、例えば「本文の聞き取り」について授業中に丁寧に指導しても、結局その単元終末時（学期末テスト）には英文を読み取る力を評価する問題を出題するという「指導と評価」に一貫性がなかった。

今回の学習指導要領では、言語材料（文法）の定着がゴールではなく、実際のコミュニケーション場面において、既習の言語材料（文法）を活用しながら、５領域（聞く・読む・やりとり・発表・書く）の目標を達成することがゴールである。

「積み木型」では、学習指導要領改訂の趣旨を実現するにはデメリットが大きい。そこで、今回は「ジグソーパズル型授業」を自身の授業スタイルとして運用していきたいと考えた。「ジグソーパズル型授業（以下「ジグソーパズル型」）」とは、「各単元において、評価する領域（どのような力を身に付けさせるのか）を事前に明確にして、指導の焦点化を図りながら、形成的評価を繰り返すことで、各領域の力を身に付けさせる授業」である。英語の力はたった１時間の授業で身に付くことはないという大前提を忘れず、中長期スパンでの「ジグソーパズル型」で、評価することに向かって指導を行っていくという実践を進めていきたいと考え、主題を設定した。

2　実践の内容と方法

(1) 単元目標

① 単元目標一覧表【資料１】

各単元の単元目標は、その単元内容に適した領域について、最大２つまでを目標として設定した。これは、単元指導において全領域をバランスよく総合的、統合的に指導することは必要不可欠であるが、単元終末時に３つ以上の領域について評価するのは、現実的ではないと判断したためである。

また、生徒に関心や意欲をもって授業に取り組ませるためには、いかに自分事として捉えさせるのかということが極めて重要であり、何のために行うのかという目的意識は欠かせない。

そこで、単元目標の中に、必ず活動の「目的」を含めるようにした。例えば、Lesson3 Take Action! 3 Listen（New Crown　３年生　教科書 p46）の単元目標は「相手の好みに合わせたプレゼントを選ぶために（目的）、ある程度の長さのボイスメッセージを聞いて、必要な情報を聞き取ることができる。」とした。このように、「目的」を明確にし、授業の進め方を以下のように改善した。

教科書記載通りの指導手順	目的意識を含めた指導手順
【場面】夏海は、オリビアおばあさんの誕生日プレゼントを考えるために、２つの質問をメールで送りました。学校から帰ると、おばあさんからボイスメッセージが届いていました。	
① 夏海がおばあさんにどんな質問をしたのかを考える ② 新出語彙を参考に、ボイスメッセージで使われる表現を確認する ③ ボイスメッセージを聞いて、夏海の質問とおばあさんの答えをメモする ④ 「あなたが夏海なら、おばあさんに何をプレゼントするか。それはなぜか。」という設問に答える	① 生徒が夏海になりきることを伝え、おばあさんに送った質問を確認する What is your favorite color? What is your favorite food? ② 新出語彙の意味と発音を確認する ③ ボイスメッセージを聞いておばあさんの質問に対する答えをメモする ④ おばあさんの答えから、適切なプレゼントを考える

教科書記載どおりに授業を進めていては、ボイスメッセージから夏海の質問とおばあさんの回答の両方を聞き取ることになる。しかし、それでは生徒にとって、どんな場面（立場）でそのボイスメッセージを聞いているのかが不明瞭である。一方、「相手の好みに合わせたプレゼントを選ぶために聞く」という目的を明確にすることで、夏海の立場になって、おばあさんの質問に対する答えや、プレゼントを選ぶためにおばあさんの好みを聞き取るということに焦点を当てることができた。

このような手立てが「目的や場面、状況に合わせたコミュニケーション能力」を育成するひとつの好例になったと考えている。

(2) 単元指導構想

① 単元指導計画【資料２】

「短時間集中指導では指導効果が低い」「指導と評価の一貫性がない」という「積み木型」の課題を克服するために、単元を通して、育成すべき領域の力を継続して指導し高めていく単元計画を作成した。

例えば Lesson6 USE Write（New Crown １年生　p104-105）では、単元目標を「思い出日記を掲示するために、今年一番の思い出について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理して、簡単な語句や文を用いてまとまりのある思い出絵日記を書くことができる。」と設定し、単元を通して（帯活動として）過去形を使用したまとまりのある英文を書くという指導を繰り返した。具体的には、教科書本文を読み取らせた後、その本文の文構造を活用して、情報を変えた日本語メモをもとに、思い出日記を書くという活動をさせた（以下枠内①から⑥の順番）。

これにより、生徒は単元目標達成に向けて、パラレルな（類似の）まとまりのある英文を何度も書くことができ、過去の自分から少しずつ成長していることを実感することもできた。これは「短時間集中指導では指導効果が低い」という課題を克服するひとつの手立てになった。

①GET Part1 本文→②GET Part2 本文（モノローグに変換）→③GET Part1 本文パラレル（類似）→④GET Part2 本文のパラレル（類似）→⑤USE Read 本文（左側）→⑥USE Read 本文（右側）

単元終末時には、生徒自身の実際の今年一番の思い出日記を書かせて、書くことの力を評価とするとともに、教師側で設定した日本語メモをもとに、思い出日記を書くテストも実施して、書くことの力を評価した。これは「指導と評価の一貫性を確保する」ためのひとつの手立てになったと考えている。

(3) 評価方法

① テスト細目【資料３】

学習指導要領の改訂で評価の観点（４観点から３観点へ）や領域（４技能から５領域へ）が変更になったことから、どのような方法で評価するのかを明確にしておく必要があると考え、前年度中にテスト細目を作成した。作成で特に留意したことは以下のとおりである。

①　学期を通して、３観点および５領域の評価バランスを大切にする。 ②　文脈や使用場面のある問題とする。 ③　解答する際に使用する言語材料（文法）を明示していないことを確認する。 ④　評価する対象の言語材料以外の言語材料における誤りで減点したり誤答とした

りといった採点基準になっていないかを確認する。
⑤ 理解の領域（聞く・読む）における知識・技能は、当該単元で指導した言語材料（文法）を使用した英文の「内容」を理解しているかの問題で評価する。また、思考・判断・表現は、「必要な情報」「概要」「要点」を捉えることができているかの問題で評価する（特定の言語材料は指定しなくても良い）。
⑥ 表現の領域（やりとり・発表・書く）における知識・技能は「言語使用（文法）の正確さ」を評価する問題とする。また、思考・判断・表現は「表現内容の適切さ」を評価する問題とする。

例えば、上記②の「文脈や使用場面のある問題」を出題することを決めたことで、単純に言語材料（文法）の並べ替え問題や適語記入問題などの「いわゆる文法問題」を解答する力を身に付けさせる授業から、互いの考えや気持ちを伝え合う対話的な言語活動や、具体的な課題を設定するなどして学習した語彙、表現などを実際に使用する言語活動を繰り返す授業へと改善することができた。

また、上記⑤の「必要な情報・概要・要点を捉えることができるかを評価する問題（思考・判断・表現）」を出題することを決めたことで、英文を読み（聞き）取らせる授業において、発問の焦点化を図れたり、過度な本文表現の解説時間を削減したりできるなどのメリットがあった。

3 成果

(1) 単元目標の達成を常に意識したことにより、コミュニケーションにおける目的や場面，状況を設定した課題（教科書のパラレル課題）を活用しながら「言語活動」を行うことができた。

(2) 言語材料の定着に向けて，解説やパタンプラクティスの時間を極力減らし「言語活動」の中で当該言語材料を使用させるように授業構成を工夫することができた。

4 今後の課題

(1) 単元目標一覧表の単元目標を意識して授業を進めてきた。記載の全ての単元目標について指導と評価を行うことは現実的に難しかった。今年度の指導を振り返り、単元目標の精選が必要である。

(2) 今回の学習指導要領改訂の重要なキーワードは「言語活動」である。上記のとおり、授業に「言語活動」を取り入れることができたのは成果といえるが、一方で「言語活動」は生徒が考える時間が必要で，パタンプラクティスなどの練習と比べ，英語に触れる量が減ってしまうことも実践を通して分かった。今後は、どのような指導バランスが英語力向上に最も効果的なのか，今後も研鑽を積み重ねていきたい。

5 協議題

(1) 参加している先生方の授業において、学習指導要領の目標を達成するためにどのような具体的な手立てを実施しているのか

6 参考文献

文部科学省　「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語編」開隆堂 2018
国立教育施策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料」
小泉利恵　「実例でわかる　英語テスト作成ガイド」　大修館書店 2017